



68年運動：ドイツ・西ヨーロッパ・アメリカ [翻訳]

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ギルヒャー=ホルタイ, イングリッド, ペピン, ハンス・ヨアヒム, 大津, 俊雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005884

^{ハンス} Hans - ^{ヨアヒム} Joachim ^{ペピン} Pepping (大阪府立大学)

大津 俊雄 (神戸国際大学) 共訳

以下に翻訳者は Ingrid Gilcher-Holtey, Die 68er Bewegung, Deutschland — Westeuropa — USA (München 2001) の翻訳の第三章第一説を掲載する。

Ⅲ 「もう一つの」社会への途上における運動化過程

社会運動は自発的に成功するはずがない。効力を見せるために必要なのは、連合するパートナーの指示である。すなわち独立しているが収斂する政治的力（政党、利益共同体、社会的に有意義なグループ、関連運動）である。連合政府の中にある弱点がしばしば社会運動の失敗をもたらす一方では、調和した行動が運動化成功の基礎を形成している。それ故連合政府は社会運動の過程において、決定的な要素である。

USA、フランス、イタリア、西独の新左翼の学生支持グループの戦略は、連合パートナーの選択や国家的抵抗の調整の程度に関しては異なっている。にもかかわらず様々な国の運動過程は、重複した共通点があるのが特徴である。この共通点は以下の3点によるものである。まず新左翼の変動戦略によるものであり、この戦略では支持グループが同じ基本的質問の回答をするように強いられた。次に反抗に対する国家の管理機関の反応によるものである。最後に運動間の移転によるものである。

1. (毛沢東の)「長征」：戦略や連合

現代社会の秩序の中へ、組織化された労働者を広範囲に統合する想定は、新左翼支持グループの注目を、社会的・民族的には縁辺に居るグループの運動化に向けさせた。並びに第三世界の解放運動の支持にも向けさせた。しかし大学以外の運動過程は、色々なマニフェストや決議が想像したように、1967年春までは行われていなかった。アメリカを別として、大学個々の抵抗では全国の学生運動の形成は見られなかった。この不休の時にUSAの大学の反乱は、全世界のためのゴーサインになった。この反乱はベトナム戦争の拡大や米国民権運動のある部分（学生非暴力調整委員会 SNCC、ブラック・パンサー）のラディカル化と密接に結びついていた。

USA, 1967年夏・秋：

SNCC とブラック・パンサー党が宣伝した衝突の対決戦略は、1967年夏のゲッター反乱で表現されると同時に益々増える徴兵を背景にして、学生運動がほとんど全ての

学に突然広がる。この二つの出来事（ゲットー反乱と徴兵制）は SDS の中に対極化を呼び起こす。連盟内での議論の決定的な相違点は、ベトナム戦争に対する抵抗に行動を集中させる事はない、ということである。連盟内の全派閥は、行動が一点に集中する懸念を放棄した。むしろターゲット・グループを巡る定義の論争あるいは「革命的主体」の定義の論争が、権力闘争やライバル闘争をかき立てる。兵役拒否者の中に学生は多数居るが、徴兵された者の中では少数派である。「成功する反戦運動は、学生に集中しては良くない。むしろ主な分担者を含めないといけない。それは労働者である」と SDS 中の PLP（毛沢東派）のメンバーが異議を唱えている。しかし反戦運動は対決戦略によって、労働者から孤立する恐れがある。労働者を統合するためには「抵抗」を宣伝する事ではなくて、むしろ基礎形成ベースビルディングを始める事が重要である。行動を通じた運動化ではなくて、むしろ組織化を通してである、と学生と労働者の連盟が狙う原則は語る。

これで毛沢東派の学生は、連盟内の二つの派閥から自らを区切った。他の二つは行動のエスカレートを通して頭の革命化を優先する派閥である。その二つの派閥とは、一方では 1966 年以降学生勢力のコンセプトを代表しているグループであり、他方では市民権運動のラディカルな派閥に方針付けられたグループである。その派閥は第三世界の解放運動を支援して、大都会の中でのゲリラ戦略への転換を堅持する。学生勢力構築の賛成派はキャンパスから出発する。彼らは官僚主義的テクノラートの全能的管理に対して、軍需産業財閥並びに大学の軍隊や武器産業との共犯に対して、学生達を反対運動化する。大学で改革を導入する事は、彼等の関心事ではなくて、むしろ学生達を「社会変動の代理人」にすることに關心がある。彼らを通して、若いインテリ層の、政治の、国の政治的や社会的な組織を変えるための、代理人である。ゲリラ戦略支持者の弁護は次のことから始まる。つまり自国の中の抵抗が成長し、権力機構と戦争反対派との直接対決の結果として、システムの経費が上がることだけが、戦争終結を可能にする、ということである。ニューアーク（1967 年 7 月）のゲットー反乱の後、「ポート・ユーロン宣言」の著者であるトム・ヘイドンもこの確信に到達する。

毛沢東派は規律ある組織化や作業を通して、数多い地方の SDS グループの中に益々影響を獲得して、そこへ工場労働者の受け容れを開始して宣伝する一方、SDS の国家的指導層は挑戦的で象徴的な行動によって大衆運動化を進めている。彼ら指導層は 1967 年 10 月 21 日に予定されたワシントンへの行進に参加するよう呼びかける。この行進は平和運動の代表者 Dave Dellingerデイヴ デリンガーが計画したように、戦争反対派の一番大きなデモになり、これまではデモ参加者数が益々増加しているにもかかわらず成し遂げ得なかったことを力づくで実現するよう、つまり戦争政策の変化を成し遂げるよう、彼は願った。アメリカ社会の認識を、前よりも強く抵抗運動という関心事に向けさせるために、彼はパークリー・キャンパスの SDS の重要人物である Jerry Rubinジェリー ルービンに、その行進の計画を任せた。ルービンは 1965 年以來、サンフランシスコ湾で鉄道網を使う軍需品の搬出を、市

民の様々な不服従の行動を通して止めようとした。限られたルール違反の戦略で訓練された彼は、次の計画を立てた。つまりリンカーン祈念堂での集会の後、参加者はアメリカの軍事力の象徴的な場所ペンタゴン国防省に向かって行進することである。それは建物の前庭から権力中枢に突入を試み、象徴的に占領し、少なくとも短時間でも仕事を停止させる計画である。

こうしたデモの段階分けは、平和運動・リベラルなグループ・新左翼の抵抗を一つの行動にまとめて、その段階で様々な集会の形態のために活用場所を作るという戦略を反映している。リンカーン祈念堂の集会後にペンタゴンに向かって行進する学生は、集会参加者の全てではない。ペンタゴンに行く者はとりわけ男女学生達とヒッピー、「平和に向けたストをする女達のグループ」の代表者、並びにインテリが居た。その中にはデイヴ・デリンジャー、^{ベンジャミン スポック} Benjamin Spock博士、^{ノーム チョムスキー} Noam Chomsky、^{ノーマン メイラー} Norman Mailerが居た。ノーマン・メイラーはペンタゴンの前で起こっている事を、彼の本「闇夜の軍団 ― 歴史としての小説 ―」（1968）で記述している。SDS メンバーで出来ている自称「革命的部隊」が封鎖の柵を乗り越えて横の出入り口を通して、ペンタゴンに侵入することに成功した。ポールから星条旗が降ろされた。ペンタゴン警備の警官と軍人とデモ参加者の間を、ヒッピーがうろうろしている。デモ参加者は先駆者のごとく要塞に突入しようとしている。ヒッピー達は「私達に参加して下さい」と言いながら兵士のライフルの銃口に花を入れて、胸をはだけて公然と性交して挑発する。「革命的部隊」の行動者がペンタゴン内部で逮捕されて、スポック博士は別として、著名なインテリは中央出入口に近付いて話しかけようとして逮捕された。参加者の群れは解体した。数千人が残っている。彼らは大麻の入った平和のパイプを飲み回しながら徹夜する。学生はペンタゴン前広場を道路封鎖するための木の棒を燃やしてキャンプファイアーをした。火の光の中で学生が着るカラフルな服と南北戦争の北軍制服のジャケットが、ビートルズの新しいLPのカバーに似てきた。「サージェント・ペパーを求めているヒッピー」とメイラーが記録の中に書いた。最後まで頑張りぬく学生の中には、徴兵検査礼状をポケットの中に持っている者も大勢いる。益々暗くなるとその令状が点火され、アツと言う間に燃えてしまう。しかし彼らは令状を小さく明るい松明として灯し、それが遠くからでも見える。それらは抵抗の象徴的サインである。しかしこの抵抗は普通では懲役4～5年の刑に当たる。包囲は兵士や警官によって暴力的に修了されるまでに1日半が経過する。警官や兵士は女性に対して特別激しく進軍する。翌日の新聞の大半は、大デモについてわずかしき記事にしなかった。ノーマン・メイラーの観測では75,000～90,000人のデモ参加者が居た。

ドイツ 1967年夏～67・68年冬：

10月21日に西独でも数多くの都市でベトナム戦争に対する抵抗運動がある。フランクフルトではSDSに組織された、およそ500人の大学生や高校生に支持されたデモが、

平和的に行われた。しかしベルリンでは公式デモの終了後に、クーダム通りの通行を止めようとする1,500人のデモ参加者と警官との間で激しい衝突が起きる。彼らはベルリン中心部を駆け足で通り、1967年10月9日ボリビアで殺されたチェ・ゲバラの顔写真の看板を持ちながら、人込みを押しつけて進む。フランクフルトの学生はベトナム戦争に関する様々な命題を英語でアメリカ兵に語りかける一方、ベルリンのデモはローカルな政治にも関係を持つ。

「USAはベトナムから出て行け！シュプリングァー出版の社屋を爆撃しよう！」というスローガンのシュプレヒコールが、それを明らかにしている。同様にシェーンベルグ地区の市役所に貼った看板に次のスローガンが書いてあった。「シュッツ（市長）の肋骨を折って——全力を評議会に」と。（訳者註1）

1967年6月2日の出来事は街の状況を変えた。ペルシャのパーレビ国王に反対するデモの終了後に、学生Benno Ohnesorg^{ベノ オーネズルグ}を狙った警官のピストルからの殺人的発砲は、パニックや驚愕や怒りを呼び起こした。（訳者註2） 学生グループの運動を今までむしろ遠くから見守って来た多くの人達は、自分との関連を感じ、そのショックを政治的参加へと変えた。それによって学生の抵抗運動の基盤が広がったのはベルリンだけではなく、西独の他大学へ抵抗の火花が飛び火した。全国の追悼式または記念式典には、助手・教授やリベラルなインテル層の代表者が参加した。SDSや教授達の代表者は、自分の解釈によって、その場面の認識を決定的に形作った。つまり彼らはベルリンでの出来事を先取りされた緊急対策の表現と見なした。この解釈は抵抗を政治的な目的へと集約した。その目的とは全政党が大連立（SPD,CDU）政権によって国会に法案提出した非常事態宣言法の阻止である。大学・国家・社会に於ける権威的支配は、ベルリンの事件の中に集光レンズのごとくまとめられていたようであり、それ故に始めて分析可能となったようでもある。ドイツ歌劇場前のピストル発射は、少数派や無党派層を排除しようとしている政治の頂点と見なされた。地方における反非常事態宣言法委員会が全国に作られた。

ハノーバー（1967年6月）でオーネズルグの追悼式に続いてSDSの会議が行われたが、そこでもう既にSDS内の対立がはっきり浮かび上がってきた。マールブルグ大学の政治学者Wolfgang Abentroth^{ヴォルフガング アーベントロート}が支持した小グループの立場で見れば、西独の事情は非常事態宣言法の防衛や民主主義の救済のためのインテリ層と労働運動との連携によってのみ変化されえた。他方では反権威主義的な派閥は、違う戦略を守ろうとする。労働者層は解放運動の特権的先駆者ではないと確信したルディ・ドウチケは、「行動センター」の設立によって大学内外の反権威主義的で純民主主義的な陣地の拡大を呼びかけた。こうした行動センターは直接活動によって非常事態法やNPD（ドイツ国民党）やベトナムあるいはラテン・アメリカについて啓蒙するものであった。彼は自分の行動原理を次の発言で表した。「私たちのルールは非合理的民主主義では有効なルールではない。学生連盟の政治化の出発点は、この非合理ルールを我々が意識的に突破しなくてはいけない。」こ

ユルゲン ハーバマス
の発言はJuergen Habermasを行動させて、ドウチケが自分の提案を具体化するよう要求した。何故なら「自発的イデオロギー」は「左翼ファシズム」の危険を意味しているからである。1967年秋フランクフルトに於ける SDS 代表者会議でルディ・ドウチケとフランクフルト SDS の理論的^{ハンス・ユルゲン クラール}代表であるHans-Juergen Krahlは、共同声明の中で新しい現場の定義を行った。その定義は、連盟内に起こっている解釈の独占を巡る戦いを明白にした。労働者階層とインテリ階層の連盟代表者に対して、ドウチケとクラールはゲリラ戦略の考えによって抵抗した。代表者は KPD（西独共産党）または東独の SED に近いメンバーによって支持されていた。「この戦略」は活躍しているマイノリティに重要な役割を与えた。それは支配しているシステムの抽象的暴力を肉体的に確信させる認識過程を導入するための役割であった。彼らは自由運動を模範にして第三世界の「一発シュートのプロパガンダ」に大都市の「行為のプロパガンダ」を加えることを要求した。この戦略の目的は、野党運動が組織で拒否する課程から出発する事が出来るという「ラディカルな野党」の広がりであった。これによってアメリカの SDS と同様に、異なる両極が強調された。この極はフランクフルトで更にもう一つの地位が指し示された。つまり SDS から処分された仲間^{ディーター クンツェルマン}Dieter Kunzermannは会議場のロビーで中国の文化大革命歌のレコードを会議の間中ずっと大音響で流した。6月2日の出来事によって、更なる2つのプロジェクトが直接的に引き起こされた。それはベルリンに於ける批判的大学の設立並びに全国の反シュプルリンガー・キャンペーンであった。批判的大学は科学主義（訳者註3）に代替案を対立させる目的で設立された。この大学は実践された大学批判やカリキュラム改革の公開討論の場になるはずであり、かつ今までの理論的教育批判を実践に変えるはずであっただけでなく、むしろ大学生達を将来の職業現場において「批判的知識人」とする機能や役割を同時に準備するはずであった。

USA で数多くの自由大学が、新左翼の影響を横に押しやる反文化の行事の影響を受ける一方で、ベルリンの試みでは社会政治的テーマや大学を中心とした催しの方が多かった。この催しでは SDS の理論的ワーキング・グループの影響がまだ残っていた。大学のコースはセミナーとオフィシャルな講義のための補講として、ある程度計画された。批判的大学でのプロジェクト参加者の共通点は、民主主義的社会の中における大学の民主化であった。しかし批判的大学の傘下では、互いに競う構想が競合した。すなわち運営参加（権力参加）による民主化または自主決定（反権力の構築）による民主化の構築であった。SDS の大学報告書によると SDS が目指した大学改革の目的は、大学委員会において学生も平等な権利を 1/3 導入することである。ドウチケが「批判的大学 (KU)」を「少数派運動家の戦いの道具」として定義した。^{メタファー}暗喩としてこの制度を通して（毛沢東の）「長征」の公式は、両方の戦略を取り込むことである。だが公式に補完されて具体化して拡大された「長征」は、現存制度の中での決定プロセスの参加権や発言権の拡大では終わらなかなっただけでなく、もう一つの事があった。むしろ「長征」は、既

存制度外での反権力の形成を取り込んだ。その「長征」はラディカルな少数派に限った法律違反によって、反権力のきっかけを与えられた。彼らは社会変化の前提として見なされていた非協調主義と拒否とを、既存制度内で実行した。批判的大学の枠内での「第三世界——^{メトロポリス}大都市セミナー」のためのドウチケの計画は、政治や社会のメカニズムへの導入と共に、軍隊から逃亡する意識ある米国軍人に向けた違法ラジオ局の設立とキューバ旅行をも予定した。後者はキューバ政府当局が学生の受け入れを拒否した事により失敗した。

ドウチケによって呼び起こされた「ラディカル少数派」に「長征」の過程において重要な役割を与えたのは、新左翼と旧左翼との戦いから生じた、新しい党の設立拒否であった。「革命的意識グループ」による多数で様々な運動化は反権威主義派の答えであった一方、それに対峙している SDS 内の左翼社会主義派は反シュプリンガー・キャンペーンに人々を駆り立てた。この一派は調整された運動だけが市民の啓蒙を呼び覚ます事が出来ると確信している。それ故にイースターの運動から生まれてきた軍備縮小のキャンペーンを、この派は反シュプリンガー・キャンペーンの実行に組み立てようとした。その上この派はシュピーゲル誌編集者 ^{ルドルフ アウグスタイン} Rudolf Augstein 並びに出版者である ^{ゲルト ブケリウス} Gerd Bucerius に連絡を取った。具体的に言えば、操作的報道を暴露する目標を持つ大型の催しが計画された。この報道のやり方とは、デモをしているベルリンの学生に対して特別なつまりユダヤ人迫害のような雰囲気、市民に呼び起こさせたそうである。会議の政治性は地方の実行委員会の成立によって支えられた。この委員会は社会的・場所的にも集中している ^{エクストラ ブラット} ビラ戦争並びに「EXTRA BLATT」のような反体制新聞の設立によって、世論を啓蒙するべきであった。「シュプリンガーを収容せよ」というスローガンの「シュプリンガー公聴会」は、それぞれ異なるロープを編んで一つにする予定であった。

この公聴会は 1968 年 2 月 9 日のために用意されていたが、実行はされていない。SDS 内の戦略的で同盟政治的な違いは、計画を妨害する。2 月 8 日フランクフルトでハンス・ユルゲン・クラールが、SDS の学生と政治的な意識のある労働組合の様々な部分並びにリベラルなメディアの同盟に対して、強力で反抗する。

彼は意識の組織化が異なると指摘しながら ^{アウグシュタイン ブレンネル}「Augstein と Brenner (IG 鉄鋼労働組合会長) の連合」を断っている。2 月 1 日にはもう既にベルリンで批判的大学の枠内でのシュプリンガー公聴会の準備のための催しに、モロトフ・カクテル (火炎瓶) の作り方についての映画が上映されて、終わりの頃にシュプリンガーの高層ビルの写真が挿入された。次の日の夜中にはシュプリンガー・コンツェルンの 6 つの支店に投石が行なわれて、ベルリンの上院と自由大学の当局者によってシュプリンガー公聴会への運動化の催しの禁止を招いた。2 月 10 日に自由大学で開催された公聴会にアウグスタインとブケリウスは欠席したので、ヒアリングは後回しにされている。しかしもう会議にはならない。直接的行動による妨害の原理は、自分達の中の方に向かって来て、院外反対勢力のある

党派の計画された運動を妨害している。その宗派は批判的インテリ、リベラルなメディア、労働組合並びに軍縮キャンペーンの調和した運動を重視する。

イタリア 1967/68 年冬：

イタリアにおいて 1967/68 年の大学の学期始まりに、互いに論争するグループが形成される。一つは反権威的で、もう一つはオペラ的で、もう一つはマルクス・レーニン主義派である。学生達はトリエントとトリノで「ポテレ スチューデントス Potere studentesco」(学生の力)のローガンの元で、文部大臣ルイジイ ギイ Luigi Gui の改革計画が目指していることを批判した。それは大学教育が労働市場の要求に従うこと、組織が権威主義的であること並びに民主主義が不足していることである。学生達は模範的行動(占領、ボイコット、積極的スト、反講義)によって権威的組織を暴いて、同時に参加者の意識を変えようとしている。大学が社会の単なる権威組織または支配組織を反映していることを確信しながら、学生達は二重の戦略を狙っている。彼らは学生の運動化に集中していながら、同時に反権威主義的な行動形態や解釈の模範を工場に持っていきようとしている。学生によって作られた工場実行委員会は、大学内と工場内の権威組織の関連を労働者に説明するべきである。反対勢力の形成による自主決定を宣言しながら、学生力の擁護者はこの際学生運動の自立を前提にして、学生と労働者の運動の「有機的連携」を作ろうとしている。この戦略に対して、1967年2月に創刊した雑誌「イル ポテレ オペライア Il Potere Operaio (ピサ)」と、この雑誌に方向付けられたベネチア地区の流れが共同戦線を張る。オペラ主義者にとって学生達は「訓練中の労働力」であって、学生は独立や自立を持つ力にはならない。大学の勉強の経済的バリアを壊すべく「訓練中の給料」を要求して、彼らは大学の民主主義化のために力を尽くしているが、先ず第一に彼らは産業労働者の具体的問題に集中していて、1968年春から運動の重点を益々工場に移す。労働者を運動化しようとしている彼らは、特に60年代の間に貧しいイタリア南部からイタリア北部の産業地域に移住した未熟練工と単純工に呼びかけている。学生は自分自身を「革命的戦士」と名付け、労働者階級の中に存在している意識を最高に高めて表現するために、工場に介入する。彼等の反官僚主義的で草の根レベルの民主主義的方向付けは、彼らを反権威主義派と結び付けている。同時にこの方向付けは、革命的幹部党の設立を目指しているマルクス・レーニン主義者から、彼らを離している。マルクス・レーニン主義の支持グループは、特にナポリ、ミラノ、ローマで結成され、革命的な力の全国組織化を社会の変遷の前提と見なしていて、彼等の社会の発展過程の理解のために、学生達を潜在力ある革命的組織の幹部として定義している。戦略的かつ組織的な彼らは、反権威主義者やオペラ主義者とは、この定義でもって境界を定める。異なる意見集団が統一されているのは、単に二つの否定的関係によるだけである。つまり旧左翼の組合や政党からの境界を定める事によって、かつベトナムに於ける「アメリカ帝国主義」に対する抵抗によってである。

訳者註1：「市長を辞めさせて、労働者評議会を作れ」

訳者註 2 : 実は東独警察が西独警察の制服を着て発砲した。これは 2009 年 5 月 20 日 Spiegel on line
で発表された。

訳者註 3 : 科学主義とは大学の日常生活が科学のルールに従っていること。